

## 2012年第14回 IAAF 世界ジュニア選手権大会

前澤克彦

順天堂大学医学部附属浦安病院

### 1 はじめに

第14回 IAAF 世界ジュニア選手権大会が、2012年7月10日より7月15日までの6日間、スペイン第2の都市バルセロナで開催された。会場には1992年のバルセロナオリンピックのメイン会場となった Olympic Stadium (Estadi Olympic Lluís Companys de Montjuic) が使用された(図1-A, B)。7月5日に成田で結団式が行われ、翌7月6日に渡航し、高校生の一部は7月14日に帰国、本隊は7月18日に帰国した。本大会の日本代表チームドクターとして筆者が帯同しメディカルサポートを行ったので、大会の概要を含め報告する。

### 2 選手団

選手団は、外山幸男(日本陸連理事)団長、原田康弘(日本陸連強化副委員長・ジュニア育成部長)監督、山崎一彦(日本陸連強化委員・ジュニア育成部副部長・U21 エリート担当)ヘッドコーチと各担当コーチ10名、トレーナー2名、ドクター1名、鈴木一弘競技委員、渉外担当(日本陸連事務局)2

名のスタッフ計19名と男子選手27名(うち1名は負傷辞退)、女子選手15名の総勢61名により構成された。選手のうち男子9名、女子11名が高校生であった。オフィシャルサプライヤー(NIKE)1名と近畿日本ツーリスト添乗員1名も選手団に帯同した。

### 3 渡航前準備

6月下旬に派遣選手が決定されたが、内1名はコンディション不良により遠征直前にメンバーからはずれたため、残りの41名の選手に対し、文書によるメディカルアンケートを実施した。アンケート上、TUEの申請を要する選手はいなかったが、6月中旬から下旬にかけて怪我をした選手が2名存在した(足関節捻挫、肘関節捻挫)。直接検診は、渡航前日の7月5日、結団式のあとに全選手に対しおこなった。

### 4 渡航および宿泊

選手団は2隊に分かれて(ロンドン経由とフラ



図1-A Olympic Stadium (外観)



図1-B Olympic Stadium

ンクフルト経由) 現地入りしたが、これらの経路では棒高跳びの pole の輸送に許可が出なかったため、コーチ1名がシンガポール経由でその輸送を担当した。今回の大会への参加国は170か国であり、10のホテルがチームホテルとして用意され、日本チームにはOlympic Stadiumから約6Kmに位置する、Hotel Silken Diagonalがチームホテルに指定された。同ホテルにはイタリア、韓国、Hong Kong、サウジアラビアなどのチームが宿泊し、Olympic Stadiumおよび練習場(Mar Bella Stadium)へは、シャトルバス(1時間に1本、4往復程度/日)での移動となった。

選手にはツインの、スタッフにはシングルの部屋があてがわれた。別個に用意してもらったジュニアスイートタイプの部屋をトレーナールームとして活用し、その部屋にはマッサージベッドを2台並べ、トレーナーによるマッサージやストレッチなどの施術のほか、持ち込みの補食(レトルト食品30個、カップ麺48個、エネルギー食数十個)の提供の場とした(図2)。ミネラルウォーターは、ロビー奥に設置された大会デスクから毎日提供され、不足することはなかった。各室のトイレやシャワー、アメニティー、ベッドメイキングは通常のホテル仕様であり、不快を感じることはなかった(贅沢でさえあった)。ホテル内に洗濯室の設置がなかったため、徒歩数分のコインランドリーへ出向くか、(多くは)室内での洗濯となった。食事は、3食ともホテル地下の宴会場にてビュッフェタイプで提供された。パンやパスタの主食とともに、肉や魚、ハム、野菜、果物(メロン、パイナップル、スイカ、バナナ、リンゴ)、ヨーグルトの副食が並んでいたが、ミルクやジュースの類は朝のみしか提供されず、昼と夜はミネラルウォーターのみ提供された。3食とも、し

かも大会期間中、ほぼ同じ内容であったこと、ボリュームさに欠けていたことなどから、選手からはやや不満の声が聞かれた。しかし、生野菜等を食しても食あたりにならない安全な食事環境であったこと、電子レンジが2台用意され、それをレトルト食品用に自由に使用できたこと、カップ麺用の熱湯の注文に気軽に対応してもらえたことは大変感謝すべきことと思われた。また、Diagonal大通りを挟んだ向かいには大規模ショッピングセンターがあったため、食の不足分はそこで補うことが可能であり、治安も比較的良い新市街のホテルであったことから、滞在先としては非常に好条件であったと思われた。

## 5 大会運営および会場環境

今大会も、モーニングセッション(9:00~13時過ぎ)とアフタヌーンセッション(18時~22時近く)とに分けられていたが、その間隔は比較的大きく、しかも、その間隔時間内はウォームアップ場(Pau Negre)も含め会場すべてのエリアが閉鎖されたため、すべての選手はシャトルバスを利用してホテルへ一旦戻ることを余儀なくされた。

大会前日には、Olympic Stadiumの全てのエリアが時間限定で公開されたため、その時間を利用して、Technical Information Center(TIC)、Mixed Zone、Post Event Area、医務室等の所在やその動線の確認が行えた(図3)。

大会期間前の練習場としては、Mar Bella Stadium(図4)と投てき種目専用のSerrahima Stadiumが時間限定で提供され、日本チームも7月7日と8日の両日、その地で練習をおこなった(往復にはシャトルバスを利用)。表1に準備期間および

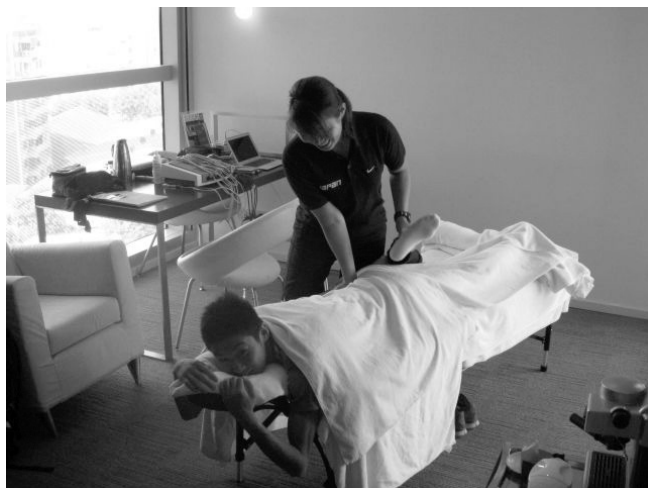


図2 トレーナールーム

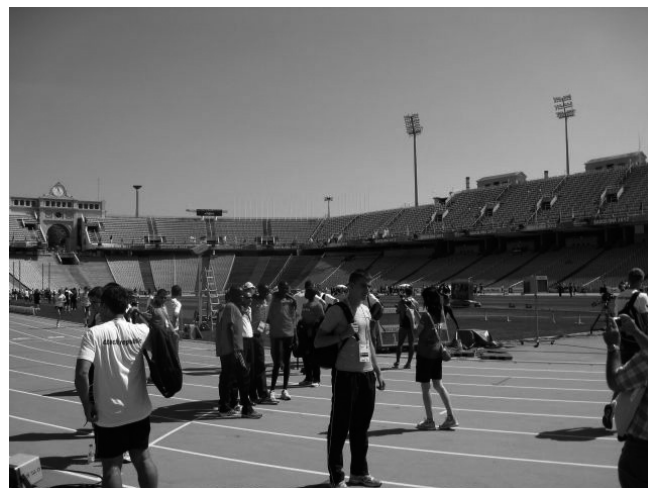


図3 大会前日の視察

表1 天候と WBGT

	午前					午後					場所
	時刻	天気	WBGT	気温	湿度	時刻	天気	WBGT	気温	湿度	
7月7日	—	—	—	—	—	17:30	晴れ	25	25.7	77	Mar Bella *
7月8日	10:00	晴れ	22.2	23.1	75	17:45	晴れ	23.4	25.4	64	
7月9日	—	—	—	—	—	12:30	晴れ	24	28.1	39	Pau Negre **
7月10日	10:30 <sup>(1)</sup>	曇り	25.2	26.5	69	19:30 <sup>(2)</sup>	晴れ	27	28.1	67	Olympic Stadium ***
7月11日	9:30 <sup>(3)</sup>	晴れ	25.3	25.7	68	19:30 <sup>(4)</sup>	晴れ	22.2	24.2	63	Olympic Stadium
7月12日	10:00 <sup>(5)</sup>	晴れ	24.5	29	44	19:00 <sup>(6)</sup>	曇り	23.6	25.2	66	Olympic Stadium
7月13日	9:00 <sup>(7)</sup>	曇り	25.2	26.2	77	21:00	曇り	24.1	25.7	75	Olympic Stadium
7月14日	—	—	—	—	—	18:30	曇り	22.7	24.5	60	Olympic Stadium
7月15日	—	—	—	—	—	19:30 <sup>(8)</sup>	曇り	21.3	23.7	65	Olympic Stadium

(1) 男子1500m 予選 (2) 女子3000m 決勝 (3) 男子10000mW 決勝 (4) 男子100m 準決勝 (5) 男子200m 予選 (6) 男子200m 準決勝  
(7) 女子10000mW 決勝 (8) 女子1500m 決勝

\* 練習場 \* ウォーミングアップ場 \* スタジアム(観覧席)

大会期間中の現地の天候を示した。全般的に、天候は晴れ～曇り、気温は25～28℃、湿度は60～70%と安定しており、WBGTも25を大きく超えることはほとんどなく、比較的穏やかな環境の中での大会となった。

## 6 医療活動

前述のように、リレー種目と投擲種目への出場予定選手各1名が怪我を抱えていたため、期間中、その回復状態のチェックをおこなった。結局、投擲種目の1名は出場したものの、リレー種目の1名は本来の状態までには回復せずメンバーからはずれた。2名とも症状は悪化しておらず、帰国後の競技活動への支障は生じていないものと推測する。

選手からのマッサージやストレッチの要求は、種目に関わらず、腰から大腿二頭筋に至る部分に関するものがほとんどであり、これらの要求に対しては、出場する種目の内容やその日程を十分に鑑みた上で、トレーナー2人により綿密なスケジュールが立てられた。また、大会期間中、マッサージベッドの1台をウォームアップ場のテント内に持ち込み、そ

こでも選手への対応が行われた。

女子長距離系種目に出場した選手がレース終了後、医務室に収容された。ゴール後、更衣室までの歩容が不安定であったため、係員が半ば強制的に医務室に連れて行ったものと思われる。収容時、体温;38.9℃、脈拍;110回/分、血圧;100mmHgであり、熱中症の診断で氷嚢と扇風機によるクーリングが施行された。経過中、解熱剤を服用させられそうになったが、これは拒否した。しばらく経過観察したのち、自前の体温計にて体温を再測定し、36℃まで低下したこと、本人は元気であることを進言したところ、血圧、脈拍も正常であったため、収容から約30分で退出の許可が出た。医務室には個室が4つ確保され、それぞれにベッドが1つずつ設置されていた。訪室時、2～3名が収容されており、ドクター1名と看護師?数名が部屋を行き来していた。比較的テキパキとした対応であった。

少数のチーム選手やスタッフからの頭痛や倦怠感、便秘症、口内炎の訴えはあったものの、大きく体調を崩した者、怪我をした者はいなかった。

## 7 ドーピングコントロール

日本チームの競技会外検査(00CT)は大会前日の7月9日に行われた。同日の朝食中、シャペロン1名が朝食会場に現れ、対象となった選手名をスタッフに告げた。対象となったのは、男子2名と女子1名の計3名であり、いずれも長距離系種目に出場する選手であった。ロビーで、シャペロンによるAccreditation Cardと顔写真による本人確認がおこなわれたが、その際、シャペロンは学生証の顔写真を使用し、検査会場へのパスポートの携行は通達しなかった。その後、選手3名、コーチ1名と筆者、および同ホテルに滞在中のカタールの選手とコーチ各1はシャペロンの乗用車に乗せられ、検査会場(Hotel H10 Marina、チームホテルの1つ)へと向



図4 大会までの練習場 (Mar Bella Stadium)

かった。OOCTは血液検査（スピッツ3本/名）のみが行われたが、その際、DCOよりパスポートを提示するよう何度も繰り返し言われたが、その都度、迎えに来たシャペロンが弁明していた。採血は幾分高齢の男性医師？1人により行われたが、手元が怪しかったと選手からの評判は悪く、選手3名に対する採血で1回の失敗があった。

競技会内検査（ICT）の実施数は不明であるが、今回の大会期間中、日本チームには検査対象になった者はいなかった。PEAでのシャペロンの動きを見る限り、実施数自体、かなり少なかったものと推測される。大会前日夕方に開かれたTechnical Meetingの席上、ドーピング検査（ICT）にはパスポートの提示が必須とアナウンスされた（コピーでは不可）。そのため、出場機会のある選手は会場にパスポートを持参しなければならず、選手やコーチは、管理上、多大なストレスを感じたものと推測され、security上の問題も大きかったと思われる。

7月13日、男子10000mWで日本ジュニア新記録が樹立された（決勝4位）。TICに赴き、ドーピングコントロールの自己申請を行なったところ、申請後ほどなく受理され、その後の検査の運営もスムーズであった。Doping Control Centerは競技場内、更衣室を出て20mくらいの場所に設置されていた。その時のセンター内は、検査中の選手が1名、検査待ちが2名いたが、広い待合スペースが確保されていたこともあり閑散とした印象の中、ライブモニターを見ながらの比較的快適な待ち時間であった。検査の手順には問題なく、プライバシーの保護に関しても問題はないようであった。

## 8 成績

銀メダル1（男子400mH）、銅メダル1（男子4×100mR、ジュニア日本新記録）の他、4位×1（男子10000mW）、6位×1（男子10000M）、7位×3（男子110mH、男子10000M、男子4×400mR）、8位×2（女子3000M、女子10000mW）と6種目で入賞を果たし、7名がPrivate Bestを記録した（図5-A、B）。

コンディションチェックシートの配布は、選手全員に対し均一に、現地到着の翌日と大会前日の2回に施行した。本来であれば、2回目のチェックは個々の試合スケジュールに合わせて行なうべきであるが、上記のような措置としたため、実際には第1回目のチェックと第2回目のチェックの間が2日しか空いておらず、選手によっては試合の9日前と7日前のチェックとなってしまうていた。コンディショ



図5-A 男子400mH 銀メダル！



図5-B 男子4×100mR 銅メダル！

ンの把握としては不十分であり、また、コンディションと成績との比較も不可能であり、大いに検討すべき点と思われた。

## 9 総括

今回のIAAF世界ジュニア選手権は、気候に恵まれた西欧の大都市での開催であったため、大きく体調を崩した選手やスタッフは認められず、選手はそれなりのコンディションでレースに臨み、無事に帰国することができた。

文中の役職は2012年7月当時のものです。ご了承ください。